足尾銅山を世界遺産へ
～取り組み状況をお知らせします～

400年の歴史を誇り、全盛期には人口３万８千余人を数え「日本一の鉱都」と呼ばれ栄えた足尾銅山。明治以降の日本の近代化と産業化に大きく貢献したと同時に、日本で初めて社会問題化した公害とその対策や経緯も歴史に大きく刻まれました。

足尾銅山は、建造物群の単なる近代産業の記念物ではなく、公害対策が今でも続く「現在進行形の遺産」として、世界遺産登録を目指しています（「足尾銅山の世界遺産登録をめざして」（http//nikko-ashio.jp）参照）。

くわしくは　文化財課　世界遺産登録推進室　☎30–1861

◉海外有識者の視察調査

4月26日(火)と6月13日(月)に、国の「稼働資産を含む産業遺産に関する有識者会議」の委員（ニール・コソン卿、マイケル・ピアソン氏）とアドバイザー（ダンカン・マーシャル氏、バリー・ギャンブル氏）による足尾銅山の視察調査が行われました（写真①）。

国指定史跡「本山製錬所跡」や鉱石の選別をする施設「通洞選鉱所」、また現在も鉱山の水処理を行っている「中才浄水場」などを視察。「産業遺産としての価値は高い。特に選鉱所に当時の機械が良好な状態で多数保存されている例は、世界的に見ても他にない」と高い評価を受けました。

◉国の文化財登録について

国の文化審議会が7月15日(金)に開催され、銅山関連施設の建造物では「足尾銅山電話資料館」「旧足尾銅山鉱業事務所付属書庫」「旧本山小学校講堂」の3件を新たに登録有形文化財に登録することを文部科学大臣に答申しました。

「足尾銅山電話資料館」は現在、古河掛水倶楽部内で公開されている「銅山電話ミニ資料館」のことで、実際に電話交換所として使用されていました。昭和26年建設の木造平屋建てで、文化住宅（大正中期以降に流行した和風住宅に洋風デザインを取り入れたもの）を思わせる外観が特徴です。

「旧足尾銅山鉱業事務所付属書庫」は、足尾鉱業事務所の付属施設として明治40年12月に建設された書類庫です。赤れんがの外壁の四隅に白い石材を帯状に配した装飾用の柱を設けた重厚な外観が特徴です。

「旧本山小学校講堂」は、昭和15年に建設された木造平屋建てで、北方ヨーロッパ風の外壁などが特徴です（写真②）。

◉掛水足尾鉱業事務所跡の調査について

足尾町掛水地区にあった鉱業事務所は、大正期に全盛を迎えた銅山を象徴する華麗な洋風建築として知られていますが、建物や史料がほとんど残っていないため、詳しいことは分かっていませんでした。このため発掘調査を行ったところ、事務所の基礎が良好な状態で残っていることが確認されました（写真③）。

また、史料調査では、事務所の平面図が発見されたことにより、その詳細な規模や竣工年月日（明治44年2月11日）が明らかになりました。

◉世界遺産登録を目指して

市は、今後も足尾銅山の価値の証明に取り組み、世界遺産登録事業を推進していきます。皆さんのご理解とご協力をお願いします。

写真① 海外有識者による視察調査の様子

写真② 洗練された外観の旧本山小学校講堂

写真③ 発掘された鉱業事務所跡